

III. 別 冊

広瀬川の水文化史

はじめに

広瀬川は仙台の町に入ると蛇行しながら東西に二分するように流れている。

仙台城は川内と呼ばれる西部にある。二分する広瀬川により東と西では町の様相が異なっていた。しかし、西部地域も東部地域も奥羽・最上地方に通じていた。

旅人が仙台の町を通過する時は川幅の狭まった場所を利用して渡河していたようである。渡河した箇所は数カ所あるが、伊達政宗の開府以前から使われていたと思わせる面影が今でも新坂を下った付近に鎌倉時代の石碑(文永 10 年)が残ることからも想像できる。

広瀬川の西部は丘陵地帯で伊達政宗が仙台城を築城しない以前は南から来ると広瀬川を渡河しないで長町から越路を経て花壇に下り、滝の口の小川を渡り、現東北大学植物園内に道があった。東部も広瀬川に阻まれていた。一部西部の道を供用して途中から分岐していた。一つは長町付近で広瀬川の浅瀬を利用して渡河して陸奥国分寺を経て多賀城へと道があった。一般的には西部の道を併用し鹿落ち坂を下り米ヶ袋で広瀬川を渡河して城下に入っていたようである。その後誓願寺渡場が出来てから広瀬川を渡河して峻険な崖を曲がりくねりながら荒町に出て城下に通じていた。

仙台藩の初期に広瀬川を渡って対岸の地と往来した場所が三カ所あった。

上流から教えてその一つは牛越の渡場で、二つは米ヶ袋の渡場、三つは誓願寺の渡場であった。その後、町の発達と交通の変遷につれて渡場の位置も変化した。支倉・中ノ瀬・評定河原・宮沢・長町等ができた。

仙台城が築かれた当初は仙台大橋が一つ架橋されたのみであった。その後仙台の発達に伴って要所々に架橋されたが、洪水のために屡々押し流され、またその架け替えの度に位置が変わった橋もある。元禄年間頃にあった橋は四カ所あった。大橋、澗橋、評定河原橋、大工橋だけであった。大橋は仙台城大手門に至る重要な橋で、最初慶長 6 年 12 月に川島豊前守によって架橋され、寛永 14 年と明治 22 年の 2 回流失している。澗橋は元禄 7 年 9 月四代藩主綱村の代に架橋し命名されたものである。大工橋は今の中ノ瀬橋の前身であり、評定河原橋は花壇にあった評定所に因む名称である。

渡場に私設の橋が架けられ渡るのには三文を要し通称三文渡しと呼ばれた。

広瀬川上流の架橋は架けても架けても洪水で流され地域交通には大変な状況でした。

広瀬川上流部は城下より荒々しい様相で対岸との交流は難儀なものでした。そのため西部と東部とでは地域開発にも差が生じている。現在の国道 48 号線も明治に入り国家的建設になってようやく光明がさしたものである。

「仙台三渡し場」

牛越の渡場

八幡町方面から今の牛越橋付近の地点を渡って対岸の三居沢や川内方面に通じた渡場。

米ヶ袋の渡場

江戸方面から仙台に入る際に根岸を迂回して越路を越えて鹿落坂を下り対岸の米ヶ袋に渡って清水小路に出た渡場。

誓願寺の渡場

愛宕山北登り口の付近にあった誓願寺前から対岸の土樋に渡し、清水小路方面に向かった渡場。荒町通りから南の上土樋三丁目を結ぶ道が誓願寺通りである。下流には宮沢渡場があった。

たのが昭和 10 年、大橋のコンクリート化が同 13 年であった。

愛宕橋の位置には、大正になっても橋がなく、子育て明神の前から崖を下って渡し舟を用い、愛宕神社の別当誓願時の名をこの渡し場に用いていたが、そこに鉄筋コンクリート橋脚の木橋の出来たのが大正 4 年、現在の橋の前に変わったのが霊屋橋と同年であった。

平成 14 年に装いも新たな橋になった。

評定河原は電車が開通した大正以後まで広い中州があって早川牧場の牛が群れ、これから霊屋下への板橋は通称五厘橋といわれ、一回 5 厘 (0.001 円) の橋賃を払って渡ったもので、それは現在の宮沢橋や、牛越橋についても同様であり、中の瀬橋は河原を挟んで東西二本に分かれていた。

引用：わが町仙台 渡辺万次郎著 昭和 52 年

「青葉山と広瀬川」

八木山の北の青葉山は、昭和になっても人家はなく、道も少なく、戦後引き揚げ者が青葉山（現東北大学工学部附近）を開拓して住み着いた。八木山の吊り橋を渡り亀岡に下りる道があった。この青葉山は学生の雪中行軍や、乗馬練習に利用されていたという。

広瀬川には橋も少なく、始めは木橋、大正時代には鉄橋であり、コンクリートの橋が架かったのは昭和の始めで、霊屋橋が大正 5 年の吊り橋から今の橋になっ

「三つしかなかった広瀬川の橋」

今から 288 年前の天和元年まで広瀬川には大橋、評定橋、支倉橋の三つしか橋はなかった。

支倉橋は川内元支倉丁の河原から城下三難所の悪名高かった支倉の崖路に通じる。しかし、出水にも簡単な板橋であったので流失も常であった。当時、城下北部と川内の往来には唯一の橋であった。

尚綱学院前の南は丘で行き止まり、澱町から知事公館前に入る道路もなかったから、この辺の侍はお城を目の前に大橋を迂回する外なかった。

それもこれも仙臺城の弱点川内北岸を有事の際、敵が渡れぬようにして置く戦略からであった。

大橋（大手町）の変遷

城と城下を結ぶ最初の橋として架けられた。広瀬川は当時「仙台川」と称された。初代大橋は、慶長6年（1601）12月落成。

貞山公治家記録の中に「仙台御城下大橋成就す。広サ5間、長サ50間アリ。川島豊前景泰監造す。覚範寺虎哉和尚ヲシテ擬宝珠ノ銘ヲ作ラシム。左ニ載ス。成就ノ日不知。仙人橋下河水千年、民安國泰、孰興^{じゆく} 奠^{じょう}天、慶長6年臘^{ろう}月吉辰」とある。

橋の材料は主として本吉郡地方の松と杉、橋の柱の数280本、片側に11カ所づつの擬宝珠を持つ、長さ116m、幅8m、橋長116m、幅10.2m、完成 昭和13年、構造 アーチ橋（3径間）

その擬宝珠には「河水千年、国泰民安」と、初代藩主伊達政宗の思いが刻された。元和3年（1617）4月大洪水で流失、天保期に再建されるが、明治22年流失、明治25年東北鎮台の軍用橋として鉄橋架替え竣工。

元和3年（1617）4月11日

洪水で流失。同年同日

花壇橋 長さ360m 屋根付き

延宝6～9年の絵図「御花壇」(御薬園)

後に花京院裏に移る。

寛永14年（1637）6月24日

再建した大橋、花壇橋が再び洪水で流

失。この大洪水で、慶長6年の「仙台橋」の銘入りの擬宝珠が流された。この擬宝珠は大正13年4月8日に桃源院の東隣桑畑

正保4年（1647）8月16日

大橋 流される。

修復後は盛大に「橋供養」を実施。

寛延元年（1748）7月

大橋 3年9ヶ月を要して完成。

昭和10年代 河床から橋脚の一部が大量に発見。そのヒノキ、ケヤキ材で家を修繕したりタンスを作った人達がいた。

天保6年（1835）7月

大洪水で流失。

明治22年9月

大洪水で流失。

明治25年8月

木橋から鉄橋大橋に架け替え。

昭和13年9月

長さ115.8m、幅10.7m

和風の勾欄と灯籠をもつコンクリートアーチ橋(勾欄：まがった手すり)

霊屋橋

橋長60.6m 復員10.10m

完成 昭和10年

構造 アーチ橋（2径間）

評定河原橋

橋長110m 幅員11.89m

完成 平成8年

構造 鋼箱桁（2径間）

広瀬橋

江戸時代初期の寛文8年(1668)架橋、

その後変遷があり、明治 42 年（1909）に我が国で最初の鉄筋コンクリート橋が架けられた。

仙臺三十八橋

仙臺に昔から七崎(ナナサキ)七坂(ナナサカ)八小路(ヤコウジ)三十八橋(サンジュウハツパシ)という名数がある。

大橋、中ノ瀬橋、澱橋、評定橋・・・までがせいぜいで、牛越橋や愛宕橋、宮沢橋、三文渡し、越路橋はどうかと、みんな藩政時代は舟渡して、橋は無かったから三十八の数には入らない。

昔は城下市中に町中堀といって街路の真ん中に堀が流れていて、そこを町が横切るところに小さな橋が架けられ一々名前があった。

それが明治以後下水道がしかれ、暗きよになったりして堀と共に橋もなくなってしまった。例えば五ツ橋のように橋の名ばかりが記憶されるにとどまったのである。

仙臺城大手門と二の丸正面詰之門の間に小さな池があって通路に橋が架かっていた。これを極楽橋と称した。

二の丸台所門から行人坂上に出る通路に、中奥の外濠（明治時代に残飯沼と称した）の水が二の丸北側の沢に落ちる所があって、橋を千貫橋と称した。

この沢水は大手門下から澱橋への道を横切り、ここに橋脚の高い筋違橋という短い橋がある。昔はここから北へ佐沼五千石の巨理屋敷前から東へカギ形に折れて澱橋に通じ、道が筋違（スジカイ）になっていたからである。

化け物話し 昔は橋の欄干に小僧が腰をかけていて、通りがかりの侍に「旦那、足を見ておくんないよ」といい、見ると足が沢の底まで届いていた

関山街道の三滝入り口の橋は聖（ヒジリ）橋といい、これは諸国を行脚して修業した高野聖に関係があるのかもしれない。

八幡町茶屋町入り口の鶏橋は大崎八幡の絵馬のにわとりが夜な夜な抜け出して来て洪水を予報した伝説による。

片平丁と一丁目頭の十字路中央の橋を袖乞橋。元荒町から香川横丁（南町通西続き）に入る所には振袖橋引き取りのないきたおれの死体は人の体に着いて祟りをしないよう、橋の阿元や坂などに埋葬する習わしがあって、こんな場所で転ぶと死霊の仕業だとして、着物の片袖をもぎ取って手向けた。後に死霊の方で袖を欲しがるように考えたのが袖乞橋の起こりで、そういう死霊を袖モギさんと称した。北田町の南端に在ったコーロギ橋も袖モギのいわれが本筋で袖を欲しがり通行人を転がすものと信じ、コロゲ橋後にコーロギになった。良覚院丁から片平丁を横切って松ノ井屋敷（十一代藩主斎義夫人真明院生母本光院隠居所）わきに流れる堀に道路いっぱい幅の橋があって百枚橋といい、片平丁の七不思議の一つであった。

新坂通と北四番丁の交差点、今の医学部側に在った橋は扇橋と称した。土橋通の土橋は尚綱学院の北、ヘクリ沢の土手道のことで明暦万治の頃に出来たという。

清水小路の北端を横切る堀とT字型に清水小路の町中堀の基点があって、三つの石橋を架け三ツ橋と称した。

二十人町の西はずれにあった思案橋は、釈迦堂二天門下の水茶屋通いの遊び客の命名だという説がある。その南、天神下へゆく所には戻り橋があった。

広瀬川淵瀬考

仙台市と旧宮城町の堺は関山街道の離山の西に在る石山沢であるが、市中を流れる広瀬川の淵名は「タタミ岩」で有名な猫淵から始まる。

荒巻文殊堂下：鵜長瀬 茶屋町はずれの下：賢淵（蜘蛛の伝説）、牛越橋の少し上流：滝の瀬 すぐ下流：藤助淵、亀岡観音堂の下：観音淵、もと野砲隊下：新兵淵 松淵 澱瀬
もと佐久間邸の下：胡桃淵 市民会館の下：六兵衛淵、中ノ瀬の下流：女淵
工兵隊の下：五間淵 大橋のすぐ下流：小川瀬、花壇川前丁銭形不動下：早坂淵 元虚空蔵淵 評定河原、片平市民センターの下：小淵 下流：馬の背 霊屋橋の下：源兵衛淵、その下流に三文渡しという板橋 鎮

所、文化年中に瑞鳳殿の地固めの石垣、鹿落坂の登り口の下に岩崩れと呼ばれる。

その下流の河中に助け岩という岩があった。その下流に、二つの淵、不明
唐戸淵：南端の岸に縛り地蔵、この河原は寛文6年から元禄3年までの刑場
その下流矢ノ瀬：米ヶ袋県工高の所に在った三十三間堂で遠矢のけいこのとき外れ矢を捨うためのヤナがかけてあった。（ヤナ：水流を堰き止め川の瀬の一箇所に簀を張る）

この附近に広瀬川発電所の吐口：松源寺淵、大釜小釜、西光院淵、愛宕橋。

昔は七郷堀の取水口の所に誓願寺の渡し（舟渡し）、宮沢渡し（舟渡し）、後に板橋、コンクリート橋。元農業短大の場所は藩政時代の流し木蔵のあった木場。右岸の淵を鎧淵、文治5年8月12日頼朝の平泉征伐のとき、ここで渡河戦が行われた。

この辺から下流が長町川と呼ばれた。昔の長町橋は今の広瀬橋の少し上流に在った。初めは徒渡し、後に土橋、列柱橋、更にコンクリート橋と変化。

引用：仙臺郷土史夜話 三原良吉著 S46.7.1

早坂淵

宝永（1751～）以前は、このあたりから流れは右にカーブして本丸の崖下を洗い、東北放送のテレビ塔が立っている長倉山に沿う崖下で大きく廻って元虚空蔵へ流れた。

水無瀬

大橋は水無瀬に架けられたので「水無

瀬橋」と呼ばれていた。

小川瀬

大橋の下流、いつも浅瀬になっているところ。右岸には嘗て片倉小十郎の屋敷があり、ここから川へ城壁のような石垣の上を斜めに下りる舟入が残っている。その南あたり、石垣の中に扇石という末広形の石があり、オコリを落とすという俗信から、時々お礼の丸餅などが上がっている。

竜ノ口沢

竜ノ口（龍ノ口層・・・模式層）からは、貝、腕足類、カニ、鯨、イルカ、サメ、珪藻の化石が発見されている。

元虚空蔵淵

広瀬川が経ヶ峰の北側を浸食して、そこに層理のある凝灰岩の大絶壁をそばだたせた。この絶壁の深淵が元虚空蔵淵である。

馬ノ背淵

元農研の下からお霊屋橋へ流れがカーブするところを馬ノ背淵と称する。瀬を走る急流が崖にぶつかって滝つぼ状の淵を抉る。嘗ては流れの速い淵であったが、今は緩やかな流れに変わっている。馬の背くらいの深さがあったためとも言われている。

源兵衛淵

霊屋橋の東崖下が有名な「源兵衛淵」である。昔は橋などはなく、崖上は「源兵衛」という者が住んでいた。ある、夏

の夜、一人の美しい女性が現れ、自分はこの淵に住む大ウナギであるが、明晩賢淵の大クモが攻めて来る。「源兵衛ここにひかえおる。」とご助言くださいと願い淵に帰った。次の夜、クモとウナギの格闘がはじまったが、源兵衛は恐ろしくて、家の中で震えていた。明るる朝見てみると、大きなウナギの首が恨めしそうに源兵衛の家のほうをにらんで横たわっていた。一目見て源兵衛は気が狂い、間もなく死んだという。

上流部の神社仏閣

「文殊堂」茶屋町南鷲巢山（文殊山）

本尊は賢淵から涌現した埋木像で、発見者・嶺八兵衛を別当として、享保元年（1716）7月、藩主・吉村堂宇を造営し、且つ修覆料として2貫文の仏領を附された。

祭日は陰暦6月24日、同9月25日

嶺八兵衛：名は長秀、初め佐藤八大院と称し、相馬中村の修験であった。父長光は若宮の別当坊で、文禄3年（1594）同僚上の坊に殺されたが、当時長光に二子あり、兄長秀年17歳、弟甚次郎定次12歳、兄弟のがれて宇多郡駒ヶ嶺にかくれて仇を伺っていた。慶長3年（1598）和州大嶺山無終峠において首尾よく仇をうった。共に重傷を負ったが、傷が治るを待って仙臺に帰った。

良覚院を主としている内、政宗の聞く所となり、長秀に対して禄を若干を賜ったので、姓名を嶺八兵衛と改めた。弟定次

は早世した。

文殊堂の本尊文殊菩薩は、八兵衛が附近の梅の木ごみが淵（賢淵ともいう）に埋もれていた埋木像を夢想の告によって取り上げたもので、伝教大師作、日本三躰の一つと称する尊像であったので、寛永3年（1626）3月堂宇を建立して之を祀る。

享保元年藩主吉村より仏領を附され、宝暦9年（1759）と寛政4年（1792）に開帳を行ったという。堂側に碑があり、宝暦4年6月、別当智巖の代の建立にかかる。

大崎八幡神社

慶長7年（1602）岩手沢（現岩出山）から遷宮。慶長12年に完成。

大崎の名は遷宮以前の国、大崎の地からとったもので米沢西郊の成島八幡に起源があり、胆沢郡八幡邑より分社したとも言われるが詳細は不明。

国宝の社殿は拝殿、本殿そしてその二殿をつなぐ石の間の三殿が一体となった権現造りの形式を有する霊廟建築で、豊国神社を模したものという。

社殿内外とも黒塗りで長押より上には極彩色の彫刻がなされ、桃山建築の典型といってもよい。

社殿前面にある文化財長床は別名割拝殿とも呼ばれる素木造りの建物です。

亀岡神社

伊達家始祖の朝宗が鎌倉の鶴ヶ岡八幡宮を当時の所領伊達郡高子邑へ勧請したのに起源する。亀岡の名はその折、霊亀が出現したということから名付けられた。

その後伊達家の所領の変遷とともに遷宮、現在の地には四代伊達綱村が城下の同心町の仮宮から遷宮。伊達家の守護神であったことから、歴代藩主からの奉納品を数多く所蔵していたが、戦災によって社殿とともに焼失。五代藩主吉村の扁額のある石鳥居、四代藩主綱村奉納の備前長船作の太刀一振。昭和40年（1965）に社殿が再建された。

為朝神社

先覚者仙台藩の林子平の「海国兵談」の預言が真になった出来事があった。それは、文化4年（1807）にロシアの軍艦が、わが北方領土、千島列島のエトロフ、クナシリの二島に上陸して大暴れしたのです。時の老中は伊達藩に全面的に指揮をしていただくことに決定。その交換条件として十一代将軍家斉の娘浅姫を嫁がせる約束をしたが早世したので、代わってその妹綾君を嫁がせることになり、伊達家九代周宗の大叔父の堀田正敦を代官として千島に出兵させ、国元は中村日向義景（景貞）に任せる。

いよいよ出陣は文化4年12月11日、その数2千20名、幕府の派兵数は600名だったが実際は3倍の兵であった。40日後の文化5年正月22日に千島派遣部隊1千2百20名が発進した。その際に神明の加護と士気高揚のために何かお社を建てる案が出た。中村はつかさず鎮西八郎為朝の神霊を祀ろうと言った。現在の場所は栗駒郡岩ヶ崎4千5百石、御一家という家柄の中村の屋敷があった。その東南角近く石垣の下に建立。間口1間、奥行1間半、流造の社殿「八郎為朝神

社」と号した。

出勤の侍、足軽はつぎつぎに参拝して、武運を祈願した。社殿は戦災で焼失した。

銭形不動

政宗公が藩の金(仙台通宝)を造る時お不動様が現れて、その形を石に彫って銭形を作った。その後、その銭型が不要になったので、その裏側にお不動様を彫った。常磐丁(市民会館周辺)の不動尊は水害のたびに犠牲者が出たので『人取り不動』と呼ばれたが、この周辺はその人々を助けたので『人助け不動』として、信心する人が参詣に訪れる。

縛り地蔵尊

キリシタン弾圧にて、ガルバリヨ神父(1577年・天正5年...ポルトガル生れ)ら信者は、元和10年(1624年)橋下にて水責で凍死し、殉教した。(仙台領第一回のキリシタン処刑である)

死骸はズタズタに切り捨てられたのを、下流の信者が拾い集めて鹿子清水に供養したもの。

キリシタンは怪力があるので化けて出るのを防ぐため五軀を縛った。(只野淳・『仙台キリシタン伝』より)今は色彩豊かな鞘堂におさまり瞑目している。

別説に、伊達騒動の立役者、伊東七十七郎が広瀬川で斬罪に処されたの供養碑だと書かれている。『伊東七十七郎伝』(斎藤莊次郎著)

顕著な建物、工業施設

知事公舎

四代藩主伊達綱村時代に、田村内蔵充 顕行 小姓頭 一番座召出の家柄 知行800石。その後、大番頭、評定役、出入司の要職を歴任して参政となった能吏。

初代の長門清武は坂上田村麻呂四世、古哲の26代、政宗夫人陽徳院の生家田村氏の一門。父は清康、母は支倉常長の娘。清武は幼くして死別、11歳の時に500石で政宗より召し出される。母は陽徳院の老女を勤めた。

出来事

ある日、長門清武は政宗の供をして仙臺城本丸の城壁に立った。時に政宗が冗談に、ここから飛び降りる者はないかと言ったところ、長門清武が即座に「それがし飛び降りてご覧にいれます」と本気に飛び込もうとして危うく留められたが、長門は余計なことを言ってしまった。「微禄にして祖先を恥ずかしめるより飛び下りて死んだ方がましだ」と思い切った口を叩いた。その言葉を聞いた政宗は立腹し、即禄を没収し、閉門に処した。二代忠宗がふびんと思い十両十人扶持を給し、その子図書頭住を小姓頭に推挙。復禄して600石とした。頭住の子が内蔵充である。

新坂を拓く

元禄8年の春、綱村は内蔵充の屋敷を北五番丁土橋通東から、今の知事公館の所に移し邸宅の普請を命じた。

この年の8月末、綱村は大いに土木を起こして澗河原に橋を架け、袖ヶ崎の丘

を切り割って土橋に通ずる道路を開いた。これが澱橋と切り通しの起源である。

この時、内蔵充は綱村に請い、屋敷前から下へ崖に坂をつけ、河原通を澱橋まで道路を通した。これらの工事の一切は9月末に完成し、川内と城下北部の交通は一変、川岸には新しく澱町が出来た。

この田村邸の坂を人呼んで「新坂」と称し、仙臺城下の大阪、扇坂、藤ヶ坂、玄貞坂、茂市ヶ坂、石名坂に新坂を加えて「仙臺七坂」と称した。

知事公館前から北山に通ずる道は貞山公葬礼場跡の大願寺前に出るので大願寺通と称したが以後新坂通の新町名に変わった。

三居沢発電所

明治初年の日本政府が紡績機械 10 数台を英国ランカシャー地方から買い取り、これを産業奨励のために希望の府県にゆずり渡した。宮城県も申し込んだがいざとなったら引き受け手がない。時の宮城郡長菅克復は宮城郡内の人々の協力を得て会社を起こした。

郡内に工場をとということで仙台と宮城郡の境のこの地に水力タービンを回して太糸をやっと生産したのは4年目のことでした。

明治 17 年 菅は試しにタービンを利用して夜は電気を灯した。茶屋町からは狐火に見えたという。また、この工場を建てるために招かれた山添喜三郎はオーストリアの博覧会に日本家屋を建てるために明治初年選ばれたひとであり、欧風の日本建築を仙台に持ち込み県の技師となり、早川智寛土木課長の下で活躍し、

後に建築主任として山添建築という、本県下の堅実な木造建築を残した。

引用：仙台あちらこちら 佐々 久著

四ツ谷用水

「広瀬川を町中に引き入れ、生活用水・水車等に利用していた」

仙台城下町は江戸城下町と同時期頃の慶長 6 年（1601）広瀬川につくった河岸段丘（上町・中町・下町）の上に伊達政宗により開かれた。

北は丘陵が連なり、西と南とは広瀬川を距てて丘陵が連なっていた。

翌年、慶長 7 年には岩出山城下町より、家臣 8,000 戸、町民 2,000 戸、寺方 250 戸、その他を併せて総戸数約 10,850 戸、人口約 52,000 人が短期間に移住。

町づくりは乾いた場所から始まり、水はけの悪い箇所には排水路工事を行い住居地になった。用水のあけぼの飲料水・雑用水・防火用水の水源は、八幡町西の湧水や沢水等を導水路にまとめ、宮町を東流させ梅田川に放水された。城下町の拡大に伴い用水が十分にまかなうことが出来なくなった。この不足を補う為に行ったのが四ツ谷用水の工事である。この用水は元和年間に家臣川村孫兵衛重吉が手掛け、二代目孫兵衛元吉に引き継がれ四代藩主綱村在世（1660-1719）の頃に開通したものである。

初代・孫兵衛は北上川付け替えと石巻湊開港、貞山堀の開設と仙台藩の土木事業に貢献

何故、遠くから水を引き入れなくてはいけなかったか

手近にある広瀬川も崖下にあり取水は無理であった。そこで、水源を上流に設け取入口（標高 65.35m）の郷六から梅田川の合流点（標高 40.09m）までの本流は、約 7,260m、落差は 25.26m ある。取水口から城下に入る大崎八幡までは導水路であり、トンネルが 4 ヶ所約 2,084m もある一大土木事業であった。

寛文 4 年頃までに郷六から取水し導水された様である。この本流から三本の支流を分流。

第一支流（延長 6,600m）は、覚性院丁 県庁 榴岡通 原町を流れ末端は灌漑用水として放流された。

第二支流（延長 2,300m）は木町 本柳町を流れ広瀬川に放水された。第二支流から分水が北三番丁、大町に流れていた。

第三支流（延長 3,650m）は北鍛冶町 国分町 清水小路（五つ橋方面）を流れ、広瀬川に放水されていた。第三支線からは枝線が多数分水されていた。

支流、枝線が城下町を毛細血管の様に流れ、その流水の推定総延長は 41 ~ 44km 余にもおよぶ。

井戸水への涵養 飲料水はどの様な方法で得たか

仙台の段丘地は、表土から地下数メートルの厚さの段丘れき層があり井戸は容易に掘ることが出来た。しかし、自然の地下水は、夏季は豊かであるが冬季は乏しくなる傾向があった。用水により地下水に涵養を持たせ年中安定させることが出来、さらに多くの湧水を生みだした。国分町では用水がすぐ脇にありながら湧水を底樋を通して給水し飲料していた。

この様に豊かな往時の水環境は、仙台藩の奨励であった屋敷林の育成にも役立ち、「杜の都」形成の大きな要因となった。日常生活においても炊事・洗濯のほか、夏期には道路への散水、冬期には雪捨場に利用された。城下には水車がありその動力源としても欠かせないものであった。流末は運河の調節水や灌漑用水として使われ、四ッ谷用水の水は一滴たりとて無駄なく利用されていた。

評定橋の七夕流し

8 月 7 日の朝、広瀬川に架かる澱橋、仲ノ瀬橋、評定橋等は賑わった。年に一度この日に限って物を洗えば汚れは必ず落ちるといって、女の子は広瀬川で髪を洗い、男の子は習字の手があがるといって硯や筆を川で洗った。また、この日をナヌカビと称して、帰りに河岸から柳の枝を葉のついたまま折りとり、乾燥して盆だなの箸にし、この夜から仏壇に面する椽の軒に盆提灯を下げる。

天明・天保時代の仙台飢饉

飢饉は大規模な凶作を原因として多数の餓死者や栄養失調による疫病死を生じる現象をいう。

しかし、冷害をもたらす気象条件など自然条件の他に、長期的な戦乱、年貢負担の過重、食糧の移動の禁止など、社会的、政治的要因が絡むことが多い。

1755 年からの宝暦の飢饉、1783 年からの天明の飢饉、1833 年からの天保の飢饉を三大飢饉として指し、仙台藩領内でも大きな悲劇を生じやすい名子、水呑百姓、町人などの餓死者は 20 万人とも 30 万人

ともいわれる。

それは冷害による大凶作のためばかりではなく、藩の厳しい収奪のため農民に余力がなかったこと、四ツ谷堰工事など労力の提供のため農民に働き手がなくなったこと、そして藩の救済策がないに等しかったことなどが被害を大きくした。

河原町や荒町などの寺院には、この飢饉で犠牲になった人々の供養塔が建ち、七夕、お盆の精霊流し、広瀬川の花火などには、この人達の霊を慰める意もこめられている。

サケの放流

広瀬川水系では、仙台市中田の名取川で広瀬名取川漁協のふ化・放流事業が行われている。放流の始まりは戦後間もない。

昭和 57 年度

約 80 万匹を放流

昭和 58 年

初めて千代大橋下の広瀬川からサケの稚魚を放流

長町 1 丁目 須藤網店 投網

広瀬名取川漁協が販売した鑑札

遊魚承認証

昭和 55 年

釣り人 5974 人、網師 2072 人

昭和 36 年

大倉ダムが出来、水量激減

42 年目

アユが海から遡上し始める。

5-6 月に水田用に水をとられ、遡上を妨げる。

社寺関係

名 称	祭 日	創 設	備 考
三瀧不動尊像		江戸中期創建	佐久間家の氏神
弘法大師の碑	竜宝寺に大師日	慶長3年(1598)	竜宝寺 草庵
大崎八幡神社	正月15日 9月14,15日	慶長12年(1607)	神社の絵馬の鶏が抜け出して洪水を知らせた
文殊堂		慶長3年	嶺八兵衛
三居沢 不動明王	1月28日 5月28日	由緒不明	山居(山中の住居) 散居(分散した住居)
法楽院観音堂(正観音)		亀岡	一番札所 国分能登守盛氏護持仏
観瀧庵観音堂		八幡町	二番札所
ニワトリ不動尊		鶏橋の阿元から移設	観瀧庵境内
縛り地藏堂 米ヶ袋			万右衛門が供養のために地藏を建立
亀岡八幡社	4月朔日 明治4年村社	鎌倉時代から 天和3年8月造営	伊達家守護社 山屋敷と象嵌の細工
銭形不動			
川内明神社(稲荷大明神)		天保年間	御小人の守り神
キリシタン殉教			
常蔵院 観音堂		長町	三十二番札所
大蔵寺 観音堂		瑞鳳寺から移設	三十三番札所
松源寺			
西光院	真言宗 悲願山	慶長10年	富沢邑主開基
長徳寺			
真福寺	時宗(遊行上人)	正中2年	安国上人

別冊

名 称	祭 日	創 設	備 考
愛宕神社		万治2年経ヶ峰から 移設	
虚空蔵堂		万治2年経ヶ峰から 移設	
宗禅寺 ニワトリ塚		寛文13年	庄子太郎左工門
愛染明王	宝性院の本尊	寛文4年 開山	由緒不明 染物業守護
橘姫供養碑 お鶴	昭和57年 蕎麦屋の主人建立	昔初めて橋を架ける 時、巡礼女を人柱	木場に住んでいた駅伝 馬の馬方達が建立
秋葉神社	5月5日	河原町大火後建立 (明治10年)	火伏せの御輿
旅立明神(保食神社)	4月28,29日	永保年中の創祀	他に四社を合祀
松原地蔵堂			
八郎為朝神社	旧暦3月15日	文化5年 北方守備のため	創建 中村日向景貞、 柴多兵庫
桃源院		安永3年 近衛氏観心院	法会修道場 黄檗宗大年寺末寺
松原地蔵尊		飢饉	ここで炊き出し
澱町瀧不動堂		文永10年(1273)	ここの古碑は仙台最古
尚綱の高台		伊達綱宗の第五女 智恵姫の隠居所	百花園(四季の花栽培)
虚空蔵 瑞鳳寺		青葉城から 虚空蔵を移設	満海上人が大般若経を この地に埋めた。
穴蔵稻荷	夕日明神	伊達氏の守護神	愛姫が安産の神とした
落合観音		寛永4年 棟札	仙台三十一番札所
牛頭天王 紙すき町		由緒不明	豊作祈願
お舟塚			明治天皇巡幸で使用
観音堂(常蔵院)		康平7年 再興	般若坊
徳照寺		寛文4年(1664)	伊達藩真宗発祥の地
藤塚		中島浜が藤塚浜	閉上の名称

平成15年11月7日 小林作成

保食（うけもち）神社 白河天皇永保年中（1081 - 83）の創祀といわれ、稻荷大明神と称したが、明治4年（1871）保食神社と改称された。

旅立大明神ともいわれるのは伊達政宗が仙台に移って初参勤の際下川原赤壁に休憩しこの社に代参をもって上洛の旅行安全を祈願し、帰国の後「旅立明神」の社号を奉ったと伝えられる。

保食神社、三輪神社、曾利町神社、雷神社、波分神社を合祀する。例祭は4月28, 29日。